

## 力動的恒常性

下 程 勇 吉

今を去る約一世紀の昔（一八五六年）ヘルマン・ロツツエは最初のもつとも體系的な人間學の著述ともいふべき「小宇宙」において、次の如き精妙な敘述を残してゐる。身體は、空間におけると同様に、その時間的發展の過程においても、嚴密に封鎖的な統一をなすものではない。それは自分自身の資力をもつて足らぬところを補ひ成長し發展するのではなく、むしろいたるところ外界にたすけられその恩恵に浴してゐる。その生命は淵 *Stundel* に、或は水流の河床において特殊な形をとつてゐる激に、たとへられる。このさい水流は一般的な自然過程をさし、その流がそこでよどむ激は有機體をさすわけであるが、その激の固有な姿こそは、等しい形で直線的におしよせる水を轉じて妙にうねり交錯する渦卷に化するのである。河床の形が同じであり、波濤がおし寄せる限り、かく波立つ運動はつねに等しい形を呈し、見たところ變らぬやうな形をとりながら、ひき切りなしにくりかへされるが、その實は刻々流は代り、たえず去來しよどみつゝ流れ行くのである。しかも河床の形は固定してゐるのではない、刻々かはる流の力がそれをたえず變へて行くからである。しかしながらかうしたことができぬとなると、そのこと自體がかゝる刺戟をうけた淵そのものの獨自な更に強力な破壊力をもたらすことになるのである。あたかも大洋の流が海底固有の形によつて規定されて一定の形に波うつやうになりながら、逆に海底自體を水平化し、そのために自分の特殊な運動の原因を

自からのぞいてしまふやうに、生命が行つた活動やその組織の一切の表出並びに營爲は、緩漫ながら確實な力をもつて、その依つて立つ根柢に對して破壊的に逆作用を及ぼすのである。だから今日の澱は昨日の澱ではない。かくくりかへしては補はれるところ、たしかに似てはゐるが、決して等しくはない状態がもたらされるのである云々 (Hermann Lotze, *Milk okosmos, Ideen zur Naturgeschichte und Geschichte der Menschheit*, Leipzig, 1923, Erster Band, S. 153-154)。

また二十年前オパーリンも亦その「生命の起源」のなかで次の如く説いてゐる。生きた原形質においては、その分解と合成が相關的に行はれ、分解された物質は直ちに合成された物質によつてとつて代られ、破壊された構造が速かに回復される。分解よりも合成の方が優位を占める不斷の物質代謝によつて、生體における全體系の「力動的安定性」(dynamic stability) がつくり出され、生體の安定した生存乃至は成長が可能となる。かゝる力動的安定性は結晶等に見られる靜止的安定性とは區別される。兩者の區別は實際の水流とその凝固した姿との相違である。水流は一定した恒常的時空的條件のもとにその一定の形態を保つが、そのことは新しい水が一定速度をもつてたえずその體系内を通過することによつてのみ可能なのである。かゝる水流は急に冷却させてその形態のまゝで固定化し得るが、その安定性は力動的なものでなく靜止的なものである。生々と流れる水流や燃えるガスの炎と同様に、新しい物質や化學的エネルギーが不斷の流をなして原形質内を通過する限り、原形質は生存できるのである云々 (山田坂仁譯一八二頁以下參照)。

次にジョン・デューキも亦その藝術論において次の如くのべてゐる。生命は環境から疎外し逸脱するとともに、努力または幸運な偶然によつて回復し環境に合一するといつた様相をくりかへしてゐるが、成長する生命である限り、その回復は決してもとの状態にそのまゝ歸るといつたものではない。といふのは生命はその不平衡と抵抗の状態を首尾よくきりぬけることによつて一層豊富にせられるからである。もし環境と生命との間のギャップが大きすぎると、生物は死亡するし、また一時的な疎外によつて、その活動が高められないならば、その生命はたゞ存在するだけであ

る。かくて一時的な疎外が生體のエネルギーと環境のエネルギーとの間に一層廣範圍にわたる平衡をうち立てる過渡段階をなすとき、生物體は成長するのである云々 (John Dewey, *Art as experience*, 1934, p. 14)。かくる立場から經驗の力動的再組織に藝術の成立を考へ、美の在り方を「力動的平衡」(dynamic equilibrium)の關係に求めてみる。ことにデューキが藝術活動において重大視するリズムは生命の力動的平衡の場において成り立つこと後述するが如くである。

最後に生命を支配する自律神經系の徹底的實證的研究によつて、體液自體の「力動的恒常性」(dynamical constancy)の場において力動的に一定量の酸度・アルカリ・鹽分・糖分等が保持せられることを究明し、いはゆる homeostasis の概念を明確にしたのは生理學者キャノンである (Walter B. Cannon, *The wisdom of the body*, 1932)。

なほかくる見地に相通するものに、生命現象の本質をその「力動的平衡」と見て理論生物學を提唱するベルクラン・フイヤニーグム等の立場がある (Bartalanffy, *Theoretische Biologie*, 1932)。

かくて、ロツツエの淵の比喩からはじめ、オパーリンの「力動的安定性」、デューキの「力動的平衡」、キャノンの「力動的恒常性」、ベルクラン・フイヤニーグムの「力動的平衡」等々と辿つて來るとき、生命の基礎概念としてこれらの概念の生物學的意義は明かであらう。しかもそれはまたより高次の次元すなはち心理學的・社會學的・經濟學的・政治學的次元においても極めて重大な意味をもつてゐると思はれる。以下我々はしばらくこれの諸元における力動的恒常性の構造乃至その意義を追求してみたいと思ふのである。

一般に生物學やことに精神病學において、器官的 (organisch) と機能的 (funktionell) とが區別せられ、常識的にも器官乃至形態があつて機能乃至作用があると考へられるのであるが、生命そのものの本質からいへば、むしろラマルクの機能は器官を可能にするといふ考へ方を徹底すべきであらう。つとに「はたらかぬものは存在しない」(Quod non agit, non existit. ヲムライブニツの命題をうけて、ロツツエは「事物は存在するときのみはたらく」といふ

ふ代りに「事物はたらくときにのみ存在する」といふべきであるときかへして力説してゐるが (op. cit. S. 328) 我々はカッシーラーとともに實體概念より機能 (函數) 概念への進展に近代思想の根本特色をみとむべきであらう (E. Cassirer, *Substanzbegriff und Funktionsbegriff*, 1910)。一定の系統をもつてはたらく諸作用の統體の場に一定の形があらはれる。力動的にはたらく力が一定の平衡を現するとき、その力動的恒常性の場に一定の構造的形態が可能となる。いはゆる種とはかゝる原形質相互間にはたらく最も根本的な作用の力動的に恒常なる構造様式にほかならぬ。種としての生物はそれ獨自の新陳代謝や活動の様式において固有の形態學的構造をあらはし且つもつてゐる。<sup>21</sup>

註 こゝに生理學的にも、古典的な局在説 Lokalisationstheorie が斥けられ、ジャクソン等によりいはゆる生理學的乃至機能的局在説 physiologische od. funktionelle L. が説かれる所以もあるのであらう。すなはち諸種の神経中枢は腦の一定部位に局在するといふよりも、その機能の中心をめぐつて波紋を擴く如く相互にはたらく諸機能の力動的全體の場が「ある箇所に存在すること」を可能にするといふべきであらう。

既述の如く、オパーリンも結晶等に見る如き靜止的安定性と區別されたものとしての力動的安定性を生命の本質的構造と見るのであるが、我々のいはゆる力動的平衡は靜止的平衡と異なるのみならず、平衡を失ふも容易に元の状態にかへる「安定的平衡」とも區別せられ、それは、デューキも語る如く、より豊かにして一層高き平衡に進み行くものである。しかもその平衡はあくまで動的にして破れ易いものであるから、それはむしろ「不安定の平衡」ともいふべきものであるが、生命が生命である限り、それはたえず平衡にかへりつゝ高まる圓環性乃至螺旋的構造を含んでゐる。かくて動的平衡とは不安定性をその成立條件としてふくむ動靜一如的統合の場において無限に螺旋的展開をなすものといはれる。かゝる動的平衡こそは人間存在の最低の次元より最高の次元を貫いてゐる本質的構造であると考へられる。

## 二

生命の場においては、外部環境とクロード・ベルナル以來のいはゆる内部環境との間に物質代謝が行はれる。エネルギーの吸収と分離、廣義の成長と分解とが相互に動機付け、その間に動的平衡が保たれるとき、一定の生命の形相が可能となる。ここでは自由エネルギーの増大をもたらす一つの系の動きが必然に他の系の動きにおいて自由エネルギーの減少をもたらし、またその逆も行はれる如き、多相的相互作用の間に動的平衡が保たれてゐる。かゝる協同的生理學的機能の場の「力動的恒常性」はキャノンによつて *homeostasis* と命名され、「それは固定不動のものとか停滞状態とかを意味するものでなく、變化するが、相對的に恒常的な状態を意味する」(op. cit. p. 23) といはれてゐる。かくいはれる動的平衡の場はあくまで動的なるものとして變化をふくみ、ある程度の不平衡を含まずしては成立せぬ如き平衡系である(柴谷篤弘「理論生物學」六四頁)。オパーリンもまた彼のいはゆる「力動的安定性」の體系がある程度の分解を含むことによつて力動的となると説いてゐる。すなはち、たえず平衡逸脱・歪を宿すこと自體において力動的に平衡を新しくするものが力動的平衡の系にほかならない。

もともと生體を構成する物質は「極度に不安定なるもの」である。それは「殆んど信すべからざるほどに微細な刺戟」に反應するほどに破れ易き平衡に作してゐる。すなはち原形質を形成してゐる膠質系は異質不均一にして多成分的であり、極度の不安定性をもつことにより、その連續的に多相的反應 *Polyphasische Reaktionen* が可能となるのである。かゝる多相的相互作用の場において、たえざる分解によりて不平衡に陥りつゝ、同時にその不平衡自體がその消去としての新しき平衡樹立を動機付ける如き、相互呼應的にして動靜一如的なる統一として、生命現象は可能となる。まさにかゝる力動的恒常性によりて、「極度に不安定な」物質より我々自身の身體の「著しき安定性」が可能となる。かく必然に不平衡をともしふ動的平衡の系にはいはゆる刺戟を缺き得ない。生命はある程度の害作用を不可缺の刺戟としてうけとり成長し己を維持する。「ある意味では、生體は己の在り方を變へ得るが故に、安定なのである——輕度の不安定性こそは生體の眞の安定性に必須な條件である」と半世紀前に語つた生理學者リッエ(Charles

Richet)の言をキャノンが引く所以であらう。むしろより大なる不平衡にたへてそれを成長の契機とするものこそ、眞に弾力的な生命といはれる。このことの教育學的意義は各方面において重大である。

註　ドイツケンズなどが子供の頃過度に病身であつたことから、敏感な毒物好きの少年となり、やがて作家となるにいたつたことがこゝで想起される。

すでに生命はその發生を受精作用といふ刺戟作用に負ひ卵の場の平衡が破れることからその成長がはじまるのである。生理的受精作用のみならず、穿刺作用・温度の變化・短波光線・電流・酸や鹽基その他の誘導物質等々の物理的化學的作用が平衡を擾亂する刺戟として卵に作用するとき、生命が成長をはじめめることは、近時の發生學的實驗が豊富な例をもつて我々に示すところである。かくて生命はその始源を平衡擾亂作用としての刺戟に動機付けられてゐる。その始源よりはじめて、生命はたえずその平衡を破られつゝ新しき高次の平衡を實現し、その間により豊かにより強くなり、より廣い環境に適合し、いはゆる平衡價 *valence of equilibrium* を高め、キャノンのいはゆる *a wide margin of safety* をもつていたるのである。これがいはゆる順應にほかならない。順應とは生命の動的平衡の場の再組織による平衡價の高まりであり、より大なる刺戟乃至不平衡に對する抵抗の強化による生命の振幅の擴大である。

かく内外環境の間に順應作用を完くし、不平衡そのものにおいてその自律的自己平衡が動機付けられる如き生體の *homeostasis* を究明したキャノンは、この聯關において自然に病から恢復する力すなはちヒポクラテスの *vis medicatrix naturae* を想起してゐる。かくる力をもつた生命の原點ともいふべき原形質自體は可能的には不死である。それは生命力に充ちた末分化の全體として最も強力な自己復元的弾力性をもち、それに加へられた害作用乃至不平衡を平衡化し得る強靱な根源的調整態をもち、それは全能性的 *totipotent* にして、一切の分化發展の原點をなすものである (B. Dittken, *Entwicklungslogie und Ganzheit*, 1936 (長澤譯ち) 参照)。未分化にして遍滿充足の全體の場よ

り發足して、生命は分化しはじめ、たえずその動的平衡を新にし生命の全體の平衡價を高めつゝ種々の機能を發揮することに於いて種々の器官をあらはし、分化即統合の進化を遂げる。かゝる進化發達を可能にする生命の諸作用の動的平衡の場のたえざる再組織はその場合に固有の振幅・速度・強度をもつて行はれる。しかしその平衡再建の速度が零となれば、死の現象がおこる。ここでは諸機能間の相互作用的な homeostasis は喪はれて、單なる物質の變化現象となるまでに分解作用が行はれる。生命の動的平衡系は時に急激に（突然死）、時に徐々に（自然死）に分解する。生命はかくて平衡と不平衡との相互呼應的輪轉體系であるが、それぞれ獨自の生活の場においてその動的平衡を保ち成長するの間、徐々にその個性的偏倚性を高め、その力動的弾力性を喪失し死滅する（この點については岩波新書 Julian Huxley の「死とは何か」参照）。その限り原形質に宿る遍滿充足の全能的根本生命力は、分化して特定の身體的生理的限定に入ることにおいて、一方に偏倚し、その極その原始的自己平衡性を疎外しつゝして死する。かく生命はかゝる根源的遍滿性より出て分化し一方的成長の極において死を迎へるのであるが、その間に時々刻々獨自なる動的平衡の場に住しつゝ一定の形相をあらはすのである。かゝる分化發展の過程は絶對的に不可逆的なる歴史性をもつてゐる。かゝる生死の間の生命の分化發展に注目するとき、我々は發生學的乃至遺傳學的領域に導かれる。この領域において動的平衡乃至力動的恒常性なるものは如何なる性格乃至意味をもつてあらうか。

### 三

今日の發生學においては、生命の分化の決定因子を卵の核に求め、これが一切の發生を決定するとすワイズマン流の機械觀的前成説 Preambulation theory がとられてゐるのであらうか。むしろかゝる説を斥け、「不安定の決定」labile determination を説くところに、今日の實驗發生學の注目すべき傾向があるといはれる。全體の發生的分化を具體的に決定するものは、核や細胞質のみならずその他あらゆる諸要素が力動的にはたらき合ふ「場」embryonic

field のもとにはゆる生理的勾配 physiological gradient にほかならない。發生を具體的に規定するものが内外環境の場合の勾配である以上、生體の分化發生は機動的力動的であつて、前成的決定的ではない。しかしさりとて全面的な決定乃至不安定がこゝで思念されてゐるのでなく、その間に自づと定まるものがあるものとして、いはゆる「不安定の決定」であり「力動的恒常性」である。

先づ卵はあらゆる方向への分化の可能性乃至可塑性を擁し、いはゆる全能性である。かゝる全能性 totipotent の場を第一次的に限定して多能性 Pluripotent の場とするものは第一次的編制原である。編制原乃至形成體 organizer, Organizer はその強力な自己平衡の中心としてその場の機能的器官の分化の中心をなす。先づ最初に卵の場の生理的勾配によつて規定されてゐる第一次編制原が卵の場の全能性を限定して多能的な場としての胚を形成し、こゝにその中軸器官として例へば神経系を設定するとともに、その多能的な場に脳・延髄・脊髄等を分化せしめる中心としての器官原基 Organanlage を可能にする。器官原基は更に第二次編制原として例へば延髄から耳胞等を發生せしめ、こゝに多能的な場から單能的 unipotent な器官が分化し成立する。しかもかゝる編制原乃至原基を中心とする各の器官の場はその間に嚴密な境界をもつものではなく、相互に干渉し影響しつゝ一なる生命全體の場をなしてゐる。かくて生命においては、未分化の原始的全體の場から次第に特殊的な器官に分化することにおいてそれ獨自の機能を發揮するにいたるとともに、かく分化せるものがまた相依りつゝ統合的に新しき全體の場を形成することによりて、分化即統合の無限なる因果輪轉相互作用の妙を發揮し（市川衛「發生の原理」其他參照）、こゝに全能性の力動的恒常性がたえざる平衡刷新の間に可能にせられる。かく分化した諸機能の統合的協同がいはゆる自律神経系における拮抗相補的な自律的支配によつて如何に精妙に行はれてゐるかは、キヤノンが驚くべき明晰性をもつて明かにしたところであら（Cannon, Bodily changes in pain, hunger, fear and rage, 2nd Edition, 1929; The wisdom of the body, 1932)。

しかもいはゆる生體の homeostasis が自律神経によりて無意識的に維持せられ、その平衡が破られると、自動的な



生理的反應によつて平衡が回復せられるところに、生理學的次元における動的平衡の根本的特色があるのであるが、生物學者や生理學者に「動的平衡」「力動的恒常性」「力動的安定性」の説があるとともに、發生學者に「不安定の決定」の説があることが我々にとつて殊に意味が深いのである。すなはち生命の根柢及びその發展を支配するものは全くの必然性でも偶然性でもないのである。そのことは人間學的に極めて重大な意味をもつといはねばならない。

かゝる「不安定の決定」の相の下に發展する生命の發生學的機序において注目すべきことは、根源的にして未分化のものほど、いはゆる強い再生力をもち、分化せる高次のものほど破滅しやすく再生能力に缺けることである。すなはち原始的にして未分化なものは加へられた害作用をこえて平衡にかへる調整能 *Regulationspotenz* をもつが、分化した高次の分節に進むにつれていはゆる單能性となり「一定の方向に固定する」ものとなる。それとともにかく分化し獨立した各器官を機能的に統合するものとして神經作用や内分泌作用が發達し、分化即統合の様相がみとめられる。こゝに基底的な生命の次元にもすでに「獨立して孤立せざる」形相がみとめられるのである。かゝる一方的機械化と全體の統合化の相即に生命の本質的機能が存することは、教育學的には心身兩面にわたり機械的復練習による特殊能力の陶冶と全體的主體的統合學習による人格統合の中心の生活教育的陶冶との關係に示唆するものがあるといはれる。

かゝる分化即統合の發達において、生命は全くの機械的必然性によつて支配されるのではなく、また全然偶然に委せられてゐるのではない。生命の場の發生的中心をなすものとして、強度の編制原的構造をもつ染色體の遺傳的規定をも否定するのは行き過ぎも甚しきものである。しかし一定の時期・一定の場において他の生物の組織の移植培養を行ひ、種々の器官を誘導し發生させる實驗によれば、同一の種においてのみ同一の編成効果があるのではなく、實に「編制効果は種を超越する」(市川「發生の原理」九八頁)といはれるのである。かくて生命の分化發展は遺傳的必然性にもよらず後先の偶然性にもよらず、「生理的勾配乃至生理的條件と遺傳因子との函數として把握し得るのでは

ないか」(同上三四頁)と推せられてゐる。このことは遺傳的決定説に立つ教育觀と環境中心の教育觀に批判的見地を示唆するものである。すなはち環境も遺傳も共に全能なのではなく、兩者の力の平行四邊形の對角線において、生命や人格の發達はつかまれるべきである。これ「不安定の決定」乃至力動的恒常性が生命の場の本質をなす限り、當然の歸結といふべきである。

#### 四

かくて生命は一定の生理的勾配をもつた力動的な場から分化し、不安定の決定性において發展するのであつて、前成の一義的にそのすべてが決定されてゐるのではない。その限り遺傳因子による先天的絶對的決定性に固執することは許されない。遺傳因子の不變性を認めることと遺傳因子の絶對的支配性を認めることとは別である。何故ならば染色體等の強力な因子の結合組織を含みつゝも全體としては力動的な場が生物の遺傳・發生・成長を具體的に決定するからである。「發生の機械觀より發生の力動觀へ」といふ近代發生學の考へ方はまた遺傳學にも妥當性をもつてゐる。従來の遺傳學によれば、生物體の在り方はあげてその遺傳因子のもつ一定不變の先天的形相によつて種的に規定せられ、全く前成的機械的に決定せられると考へられたのであつた。その限り、ある病的性質の遺傳は永久に家系的に必然であつて、その治療や教育の可能は殆んど絶望視せられたのである。しかるに實際の統計の示すところによれば、家系性の遺傳は必しも多數ではなく、散發的(單發的)な *sporadisch* ものが遙かに多いといはれてゐる。例へば、六本指の親から六本指の子が生れる例はむしろ稀である。従來はあまりにも家系性の遺傳に注目しすぎて、散發性の事例を無視しすぎたと批判せられるのみならず、メンデル流にエンドウの品種を交配させるといふ如き餘りにも單純な要素間の關係から、極めて複雑な機能の相互關係を重々無盡に宿す高等な生命の場の遺傳的發生的關係を類推するが如きは方法的にも飛躍であると批判せられるのも、故あることであらう。

アリストテレスは、生殖作用において生物は永遠なる形相にあづかり、これによつて種的规定が可能となると考へたのであるが、先天的遺傳因子の絶對的支配性を信ずる前成説的立場は男自體・女自體とか正常者自體・不具者自體といふ如き形相を考へるアリストテレス的分類觀と結びついてゐる。しかし現實的にはかゝる形相的乃至分析論理的に嚴密な區別が見られるのであらうか。オットー・ワインゲル以來認められてゐる如く、如何なる男性のうちにも女性的契機が宿り、またその逆である。如何なる正常人のうちにも不具者の要素がふくまれて居り、如何なる機能も器官も完全無缺であるといふ如き人はゐないし、またその逆である。すなはち男と女、正常人と異常人とは截然と區別せられる非連續的對立ではなくして、その間に無限に異なる比例をもつて兩者の契機の相互浸透がみとめられるのである。むしろ具體的に存在するのは兩契機の相互浸透より成る無限の連續的推移であり、無限の個別差をもつた無數の個體である。その限り形相的普遍的な男自體・女自體とは理念化の極にみとめられる限界概念にすぎない。現實に存在するものは一人一人みな異なる個體である。色盲と正常人との間にも多くの中間的移行型があり、知覺にも無限の個別差がある。あくまで個人差を重大視する近代教育學の立場は生物學的にも根據をもつてゐる。

もとより遺傳因子を全面的に否定し一切を環境的限定に歸するは誤であり行き過ぎである。核や染色體はたしかに強力な編制原的契機として遺傳を根源的に規定する恒常的契機である。しかし例へば性を決定するものは性染色體であるとともに、それ以外のものも参加するのである。すなはち睾丸要素や卵巢要素その他あらゆる内分泌要素や體質要素が相互に力動的に交渉する環境の場の全體の勻配により性の決定が行はれるのである。男性または女性といふ兩極の形相的限界概念の中間にゆれてゐるものがその場合全體の勻配値によつて何れかの方向に方向付けられる。その限り性の決定には力動的不定性がみとめられる。かくて染色體といふ恒常的契機と環境の場といふ力動的契機とが相俟つて遺傳的な發生及び成長は具體的に行はれる。その限りこゝでも力動的恒常性乃至不安定の決定といふことがみとめられるのである。すなはち遺傳においても必然性のみが支配するのではなく、偶然性のみが支配するのではない

である。かくて遺傳的必然性のみを妄信して教育における環境の意義を無視するのが誤であると同樣に、環境の如何によつて主體の在り方は如何様にもなると考へる環境中心主義も行き過ぎである。生活の場の限定が各人の成長に極めて重大な意義をもつことをみとめ、經濟的政治的條件の改革を重大視するものは、またかゝる環境中心主義の制限に對しても亦敏感でなくてはならぬのである。

## 五

以上において廣義の生物學的次元における力動的恒常性の構造を追求した我々は、進んで心理學的次元についても考察したいと思ふ。たえざる流をなしてゐる意識の場は刻々變化してゐるが、それは單なる變化ではなくて、その間に統一を宿し構造をもつ力動的體系である。その變化はレヴィンのいへば「體系内の構造的變化」structural change within the system である。意識はたえず變化を含んでゐるが、その變化はたえず平衡にかゝはりをもつ變化である。平衡こそは意識のア・プリオリである。意識は生命の場の平衡の破綻とその再建において成り立つといふべきである。變化と統一、不平衡と平衡、力動性と恒常性、これらの兩契機の徹底的相即こそ意識の本質をなす。變化や不平衡のみであれば、その意識構造は不定であり、その人格は崩壞に瀕してゐる。さりとて平衡や恒常的契機のみでも意識乃至人格は成立しない。むしろ生命の場の平衡が破れるところ、新しき平衡への行動的意欲を孕む機において意識は成り立つといふべきである。また何一つ心に波立つことなく、驚き・恐れ・羞恥心・劣等感等平衡喪失感なきものは木石または精神異狀者であつて、正常な人格ではない。むしろかく平衡を破る動性をふくんでよくその常を失はぬ彈力的人格こそ、眞の人格である。平衡においてその擾亂を覺知し、またはその擾亂において平衡を志向するのが意識であり、失はれた平衡を再建して不安定性を安定化し、また恒常的不變性を力動化せんとする根本要求に生きるのが人格である。

力動的恒常性の喪失は意識乃至人格の喪失である。力動的なるも恒常的契機に缺けるもの、またその逆のものは、何れも正常なる意識乃至人格ではない。すなはち力動的恒常的といふ相互補足的緊張性に缺けて、極度に流動的なものも、極度に固定的なるものも、ともに正常ならぬ心的状態乃至人格である。レヴィンが「意識の場の組織があまりにも流動性に缺けることと同様に、あまりにも流動的であることもまた精神薄弱的な行動の型に導く」と語る所以である。(K. Lewin, *Dynamic theory of personality*, p. 327) あまりにも興奮しやすいか、あまりにも無感動であるか、またあまりにも反抗的であるか、あまりにもおとなしきか、その間に「連続的に種々の度合をもつた緊張に缺け」、一方的に偏した「機能的硬直性」functional rigidity に止まらぬ the either-or behavior こそは、精神薄弱者の特色をなす (op. cit. p. 214, p. 215)。こゝでは、その場の状況に力動的に對處して自づから定まるしなやかさ乃至彈力性の代りに、一度定刻に水をやれと命令されると、雨の日にも水をまく如き紋切型の行動が見られる(田村一二氏報告)。また一方的に固化した方向の學習、例へば唇日や漢字の機械的な記憶には極めてすぐれてゐても、現實的な生活能力には致命的に缺ける idiot servant の在り方もこゝで想起せられるであらう。

熱烈な活動から一擧に極度の無氣力へ、はげしい興奮から甚しい倦怠へ、<sup>註一</sup>法外のやさしさから極度の邪慳さへといつた式的 either-or 型の行動が尤進するとき、精神異狀の行動があらはれるといはれよう。

註一 熱烈な活動から極度の倦怠へ、極端な軍國主義から夢想的平和主義へ、といつた式の日本人に著しい心境の激變は我々の教育にとつて重大な問題である。この點についてはメルジャエフが熱烈な宗教的信仰と急進的唯物主義的虛無主義との兩極にさまよふロシアの性格について語つたことが想起せられるであらう。日本文學は倦怠や憂鬱の文學をもつ點ではロシア文學と軌を一にするものがあるといはれる。

註二 いはゆるオールド・ミスの行動がこゝであげられる。

S はゆる dynamic condition といはれる精神状態は興奮といふ動の極から無氣力といふ靜の極へと、またその逆といつた動きを示し力動的恒常性を失ひ、健全なる人格的平衡に缺けるものであるが、あまりにも動に偏する方向には

つねに環境とともに振動する同調性 *synktonie*、回歸性、更にはその極限に躁鬱病といふ病型があらはれ、その反対の方向には、環境と力動的に接觸し得ぬ硬直した行爲に止まる常同性・分裂性 *schizoide*、更にはその極限に精神分裂症といふ病型があらはれる。

前者の方向においては、その情意作用は極めて流動的で物に感じ易く（易感性）、外界とその振動を共にし（同調性）、仕事に熱中するかと思へば、また仕事を轉々とかへ、陽氣で多辯であるかと思へば、憂鬱寡黙になるなど、感情の山と谷とをくりかへし（回歸性）、人格的恒常性を失ひ、その極限に躁鬱病があらはれる。

また同じく靜的要素を缺如するものとして痲痺性痴呆病があげられるであらうが、こゝではその極度の可動性によりて「現實との接觸」を失ひ時間的制約を撥無し一切を流動化する *dynamism* の極、荒唐無稽の誇大妄想狂となる。かく一切を力動化する症状と顯著な對立をなすものは、硬直的固定性に止まる精神分裂病である。

同調性の方向には、過度の力動性によりて歪められてゐるにせよ、なほ現實環境との接觸は保たれ、躁鬱病においても人格の荒廢を來さぬのであるが、極度の固定化により現實との接觸を失ひ内閉的常同性に止まり遂には人格の崩壞を來すのが分裂病的症狀にほかならない。もともと我々は現實乃至環境と力動的な同調性においてつながり、環境と生きた接觸を保つことによつてその刺戟の多様を統合し人格的恒常性を維持してゐる。かくて我々の生命は環境から種々の刺戟を興へられそれに力動的に對處しつゝ平衡を保つてゐる。かくて生の力動的恒常性の場において我々は現實と生きた接觸を保つのである。しかるに一度人格統合の中心が崩壞しはじめ、現實との力動的な接觸が失はれると、「心的生活の力動的要素が消滅し」「その幾何學的靜態的要素が病的に肥大する」分裂症があらはれる。分裂症の本質的特徴は不動性・硬直性・常同性・抽象性・非實踐性・不生産性にあるといはれる (E. Hinkowski, La Schizophrenie, psychopathologie des schizoïdes et des schizophènes, 1927, 村上仁譯參照)。人格が解體しその統合機能が失はれるから、現在における過去と將來との行爲的統合が不可能となり、複雑な現實に力動的に對處し得ず、その行爲は機宜を得ぬ

ものとなり（不適應性）、現實の重荷にたえきれず、自己に逃避し自己にこもることになる（自己領域性）。かく一切を意味付ける人格統合の中心がくづれ去るところ、生活價値の體系は崩壊し、その場における價値あるものと價値なきものの辨別が不可能となり、特定の觀念や行動が自律性を得て、それが病的に肥大し生活の目的論的聯關から孤立してしまひ、硬直性を帯びた無意味な活動が支配的となり（病的活動性）、或は一切他のことを顧慮せぬ「主義の人」として過度の合理主義や病的な幾何主義や道徳的杓子定木主義にはしり、同一な觀念や行動を墨守するにいたる（常同性）。かく自己にこもるところ、主觀的にはいひ難き不安寂寞感に襲はれ（孤獨性）、對人關係においては「硝子板」を隔てゝ對する如き一種名狀すべからざる冷たさが支配し、情緒的な温か味が失はれ（情緒性の喪失）、かく自己内において人格が分裂するのみならず、人々との情緒的なつながり乃至社交性を失ひ（離人性）、こゝに内外あげて分裂に陥り（分裂性）、遂には「絶對的固定が私をとりまく」といふに至り、絶對的虚無の暗黒に吸ひ込まれる。

かくて、力動的恒常性といふ生命と現實との紐帯が害はれて、力動性に偏して恒常性に缺ければ、同調的躁鬱病的となり、恒常性に偏して力動性を失へば、内閉的分裂病的となるといはれるであらうが、その決定的徴候は人格的統合性の低下による現實との接觸の異狀乃至社會性の脱落喪失といふことである。もとより分裂的症狀はいはゆる離人症として全面的に社會性を失ひ社交的でなくなるに反し、躁鬱病者は回歸的同調性をもち一見あくまで社交的であるかの如くであるが、實はその人格的恒常性は失はれんとし、皮相的に人々と「受動的接觸」を保つものとしていはゆる同調的なのであつて、その社交性は自主獨往の人格のそれと異り假象的なものである。ミンコフスキーがあげてゐるビネー、シモンの躁鬱病者の在り方についての描寫はこの點において極めて示唆的である、「病者の知能・判斷力・意志の状態を知るためには、彼等とともに語らねばならぬ。しかし彼等は何處にあるか、何處に病者の人格があるか、何處に語るべき相手があるのか、かゝる人格は存在しない、消失したのである、病者は病的現象に還元してつて、躁病者はたゞ全く談話と動作であり、鬱病者はたゞ全く呻吟である」（同上、五五頁以下）。かくて人格統合の中心

が假象化した躁鬱病においては、そのいはゆる同調性も正常人の「充實して調和的な同調性」ではなくて、「歪められた同調性」(synthone déformée (ミン・コウスキー))であつて、従つてその社交性も假象的なものにすぎない。分裂病にいたつては、社交性は全面的に喪はれる。力動的恒常性を喪ひ現實と生きた接觸を保ち得ぬ人格は社會性を喪失し、社會人たることをやめ、人にして人ではなくなるのである。

## 六

以上において、力動的恒常性こそは、人間の生理的・心理的・根本構造をなすものであり、これを缺くとき、人間は身體性・意識性・人格性に根本的缺陷を失ひ、病的存在となることが明かになつたと思はれる。しかもかゝる規定こそは、それこそ力動的な恒常性であり、不安定な安定であり、危なかしい平衡である。かゝる規定に貫かれてゐる限り、人間は生理的にも心理的にも病的にも病にかゝりやすき存在である。社會が進歩するほど、いよいよ繊細な刺戟を鋭く感ずる力動性ととも、多くの刺戟反應の系別を一貫して統合し己を維持する恒常性が要求せられる。しかもこのことたるや、現實と全人格的に取組むことを意味し、こゝには高度の精神力が弾力性に充ちた平衡においてはたらくことが要求せられる。しかも力動的にして高度の心的緊張をたゞえた平衡はそれこそ危なかしきづれやすき平衡である。こゝに、最も進化した人間の社會、しかも最も進歩した社會において精神病がいよいよ増加する所以がある。近代社會に生きる人間には高度の力動的恒常性がすなはち高度の敏感性と不撓の鐵石心との相即統一の相において要求せられる。このことは性格學的にもいはれるのである。

こゝで我々はクレッツチマーの鋭い家系的分析による性格學的洞察を想起する。彼は鐵血宰相ビスマルクのうちにひそむ神經質な「泣き虫」を見逃してはゐない。ビスマルクは父から單純朴實な力強さをうけたが、それだけでは複雑多岐にわたる近代の政治や外交に處すべくもない。この點において、彼は神經質な母から緻密鋭敏時として均衡を失



するほどの力動性を受け、父からうけた強力な一貫性と相補ひ得て、鐵血宰相として大をなし得たのであつた。またルッターにおいても、縦横な諧謔と逞しい生活力、危機における動搖と毅然たる操持といつた對立契機の相即性が見られる。まことに最高の人格的統合性は動搖する力動性と一貫する恒常性との相補的對峙緊張において實現せられる。かゝる緊張においてたえず危機に瀕しつゝ歩一步動搖の上に靜坐し、不斷の自己本來的活動において超越的視野を聞くところに、天才や英雄の業績が可能となるのである。

「力動的に恒常的」の如き兩契機の相即統一の方向に正常人乃至正常以上の人格が成り立ち、その離反分裂の方向に精神薄弱者乃至精神異常者の人格が成り立つ。まことに力動性と恒常性との相即は正常人格の本質構造をなすものである。力動性より恒常性への方向において不安定なものを安定化すること、並びにその逆の方向において安定せるものを力動化することこそは、人間の根本的要求である。こゝに近時心理學ことに教育心理學において著しく注目されながら、無原則的に羅列されてゐる要求 need または傾動 *drive* などと稱せられるものを體系化する一觀點がつかまれると思はれるが、先づプレスコットの分類を一例としてあげてみた。 (D. Prescott, *Emotion and educative process*, 1938, p. 113-124)

### 一、生理的要求

生活に必須な物質と状態（空氣・飲食物・住居等）

活動と休息のリズム的交替

性の活動

### 二、社會的要求

愛情

そのグループでみとめられること

他人とかけはなれてゐないこと

### 三、自我及び統合の要求

現實との接觸

現實との調和

言語等による象徴化の進歩

漸次自立して行くこと

成功と失敗との然るべき均衡

自我或ひは個性の確立

比較的に體系的であると思はれる彼の分類においても、分類の原理は必しも明かでないやうに思はれる。我々は上述の如く(一)不安定性よりも安定性に向ふ安定・保護・愛情の要求と(二)安定せるものをこえて新しきものに向ひ問題と取組む新奇・冒險・成長への要求とに分類する方がより體系的であると考へる。前者は保守的の友好的であり、後者は進歩的開拓的であるともいはれるが、これは人間存在を貫く要求の二大方向であつて、如何なる要求もこの二方向に包攝せられるであらう。また精神病的範疇に即していへば、前者は人々との同調的雰圍氣において安定性を得んとする消極的なる要求として同調性の要素にかち、後者はむしろ人々より獨立し獨往獨歩問題を解き積極的に安定性をかち得んとする要求として分裂性の要素にかつともいはれよう。こゝから教育學的にいつて必要ないはゆるガイダンスの基本的見地も與へられる。一言にしていへば、それは消極的要求と積極的要求、或は同調的要素と分裂的要素、社會的契機と自主的契機との相補緊張的統一といふことである。

精神分裂病者にはあたゝかな情緒的接觸が缺けてゐるといはれるが、人間に不可欠なものは情緒的なあたゝかさであり情緒的安定性である。ことに幼にかゝるものを缺くならば、その人格は歪み「心理學的傷痕」をとゞめ、永

く自他にとつて煩累のもととなるであらう。かくてその生活に友好的雰囲気をつたえ所屬感を保證し健全な同調性を與へて安定・保護・愛情の要求を充すことは、容易にその情緒的安定性を喪ひやすき幼児青少年のガイダンスとして致命的に重大である。かくすることによりて人間性に對する深き信頼もめざめてくるのである。

しかしこれは青少年を變化・不安定より守らんとするものであつて、それはむしろ消極的なガイダンスである。しかるに、縷述した如く、我々の生活は變化と問題にみち、我々の平衡は極度に破れ易きものである。こゝに消極的に變化から自己をまもり安定性を得るのではなく、積極的に變化と取組み行きづまりを打開し場を再組織し問題解決的に高次の平衡に高まり行く自主性が要求せられる。かく積極的に問題を解決することこそ、問題に充ちた現實と生きた接觸を保つ所以である。かゝる問題解決を中心とする積極的ガイダンスこそは新奇・冒險・飛躍・試練への要求を充すものである。かく積極的に問題を解くためには、各人が自己の胸で感じ自己の頭で考へ自己の足で立つ自主性が何よりも要求せられる。その限り同調的契機よりもむしろ自主的——いひ得べくんば一應社會よりはなれる意味で——分裂的契機が必要である。

しかしこゝで決定的に重大なことは、消極的ガイダンスと積極的なガイダンス、同調的契機と分裂的契機との相即統一である。これは二つの根本的要求が生命本來の在り方としての力動的恒常性の場より發するものとして必然のことである。保護の要求をみだすガイダンスにのみ偏すれば、自主的積極的に問題を解き生活において戦ひぬく強い力は生れぬであらう。さりとてたゞ戦ふ強さのみで情緒的にあたゝかな人間性に缺けるならば、それはまた險しい分裂症的性格に墮するであらう。こゝに消極積極の兩方向のガイダンスの相即こそ、力動的恒常性の場において十全なる人格形成を可能にするといはねばならない。この點で注目すべきものはミンコウスキーの「人格活動の「環境性」の概念である。環境と調和する同調性の雰囲気のもとに成長する我々は、成長とともに個性を明瞭にし、環境より一應獨立し自主的に行動し個性的に表現する。こゝに分裂性的契機があらはれる。典型的には分裂病初期において最も價値

多き詩をつくつたヘルデルリンの場合が示す如く、個性にみちた創造はむしろ分裂性の場においてあらはれる。しかしかく分裂的に獨立することはむしろより深く廣く社會につながる事がなければ全く無意義である。その限り分裂性は同調性に歸入せねばならないのである。もし絶對的に個性的であらうとして、社會につながる何もをも持たなくなれば、それは革命的でも創造的でもなくなるのみならず、無限の虚無におちこむ分裂病となる。その限り眞の個性は社會的同調性から出てそれに歸るべきである。しかも個性的分裂性を媒介とせぬ限り、創造性を缺く故に、社會的なものは高まり豊かにならない。眞の人格的活動は同調性と分裂性、社會合一性と社會疎外性との間に無限の圓環を描いて進むのである。かゝる精神生活の道をニイチェはツアラトーストラにおいて社會から離れて山に上る *Aufgang* の道と山から社會に下る *Untergang* の道の圓環性においてとらへてゐるといはれようが、トインビーもまた *A Study of History* (縮約版第十一章) において、歴史上の創造的人格がその歴史的活動の或る段階において自發的に或は強制されて引退し *wildlaw* また必然に已を新たにして社會に復歸する *return* することを幾多の例によつて興味豊かにまた洞察深くのべてゐる。

かく同調性と分裂性、社會からの引退と社會への復歸とは相即すべきであるが、どの程度まで同調的に環境の中に身を置くべきであるか、また他方自己の個性乃至獨創性を生かすために、どの程度まで環境から分裂し獨立すべきであるか——といふ間に對しては、ミンコウスキーが語る如く、「如何なる精神衛生學の法則も解答を與へ得ない」のである。もともと各個人が内外環境相關の場において獨自の生理的・心理的・歴史的勾配をもつて成り立つのは、まさしく空時的・宇宙的限定によるものであつて、ライブニッツ的にいへば、永久眞理の次元ではなく事實眞理の次元に成り立つのである。その限り個體は絶對的に代理不可能な唯一無二の主體にほかならない。已にしてかゝる性格をもつ個體が環境との關係において高次のより大なる平衡價をもつ主體となるために、環境との同調性と分裂性とを如何なる比例においてもつべきかは、それこそ代理不可能の主體としての個體がたえずその全人格的統合において生活の問題

を解く有意味的活動において身をもつて「なすことによつて學びとる」のほかなきものである。こゝに生活教育の眞義とその動かすべからざる位置もあるのである。まさしく力動的恒常性の場の焦點をなす人格統合の中心の生活的陶冶こそは、生活教育のアルファでありオメガである。

## 七

上に見た如く、力動的恒常性こそは人間の正常な生理・意識・人格の本質構造をなすものであつて、力動性のみ偏して恒常性を缺けば回歸的病態に浮動し、その逆は分裂的病態に疎外する。かゝる人格異狀において見られる決定的徴候は現實の社會の場との生きた接觸の歪曲乃至喪失である。人格の統一が失はれるとき、社會との接觸を失ふといふ精神病學的洞察は、人格形成が對人的交渉の場においてのみ可能であるといふ教育學的洞察を可能にする。人格の在り方乃至その成長に決定的影響をあたへるものは社會の場そのものの在り方である。社會の在り方が異常を呈するとき、人格異常もまた増加する。すでに我々は力動的恒常性が正常人格として社會と生きた接觸を保たせ、それを缺けば異常人として社會から離脱することを見たのであるが、力動的恒常性はかく微視的に個人が社會人たるための本質構造をなすのみならず、それはまた巨視的にも個人がその中に住む社會の場そのものの本質構造をなすといはれるであらう。こゝに我々には心理學的次元をこえて社會學的次元に進み、力動的恒常性が社會そのものの本質的規定であることを明かにしたいと思ふ。

こゝでも分析は缺如態からはじめられる。たしかに社會はその成員間に行爲の共通様式が存するとき成立すると一應いはれるであらうが、もしその際固定した恒常的な行爲様式の一様性のみが支配的であつて、一切の力動的變化を容れぬやうな社會であるならば、それは原始的な社會であり、一度外から波がおしよせると一たまりもなく亡びる脆弱な社會である。成員間に完全に一致した行爲や輿論が見られる社會は原始性或は暴力が支配する不自然な社會であ

つて、歴史的に持続する正常な社會ではない。さりとて恒常性に缺け力動性のみ偏し極度に變化する社會は如何であらうか。過度に可動性をもつ地域社會については、次の如く記述されてゐる、すなはちかゝる社會は解體に瀕するのである、そこには、有効な輿論は存在し得ないし、傳統的な掟も無視され、各人は勝手に振舞ふ、住所が頻々と變るから、投票資格を失ふ大人が多い、たえず人口が變動するから、勞働組合・教會・その他の民間團體はその機能を發揮できない、児童保護機關ことに學校は問題また問題と應接に暇なく、その奉仕は悪化の一途を辿る云々 (J. Cook, *Community backgrounds of education*, 1938, p. 94-95)。更に社會の變化急激を極めるときは、人々がその心身兩面の平衡を失ひ自殺率犯罪率が上昇し、社會は危殆に瀕するのである。

かくて恒常性と可動性との何れの極に偏しても、まともな社會は成立しないといはれる。さきに力動的恒常性の場に成り立つ生命がその安定性のためには却つて或る程度の不安定性を含んでゐなくてはならないといはれたが、社會に關してもその點は同様である。カントがその「世界公民的見地における一般史考」において(第四命題)、名譽欲・支配欲・所有欲等にもとづく敵對關係すなはち彼のいはゆる社交的非社交性 *gesellige Ungeselligkeit* がそれ自身反社會的な好ましからぬものでありながら、それが却つて安逸に耽る牧歌的原始社會をこえて社會を進歩せしめる契機となる云々と説いたことは示唆的である。とはいへ極度の悪意や高度の社會階層化 *stratification* が社會分裂に導くとき、社會は危殆に陥るのである。クックなどがよく組織せられた社會の一標徴として「合理的な拘束の埒内における競争」(Op. cit. p. 82) などをあげる所以であらう。すなはち合理的な拘束といふ如き恒常性の場を力動化しそれをたえず新しくする契機として競争・勞働組合の闘争等が存在することが健全な社會を可能ならしめる。

社會は力動性と恒常性の動的平衡の場において成立する。この點からいつて、進歩的勢力と保守的勢力との相互浸透の統一がたえずその平衡を高める如き社會こそは、健全にして進歩せる社會である。もしいはゆる進歩的勢力にして正しき傳統的恒常的契機を無視して小兒病的に非連續的の革命のみを強行せんとするならば、佛蘭西革命その他が

示す如く、それは流血の慘事をもつて反革命をあがなふにすぎない。人は余き意味で解決し得る問題のみを問題とする。眞の社會革命に社會的傳統的連續的發展の背景を必要とすること、カントの宗教論においてそのいはゆる心術の卒然たる革命が日々のたえざる道德的進歩を豫想するとせられるが如くであらう。また保守的勢力にしてたえず自己脱皮する力動性をもたず、一般社會人の進歩的な問題解決の意欲に協力せず、徒に強權もつて恒常不變の枠を墨守せんとするならば、そこには急激な爆發的破局は免れ難きものとなる。こゝで人は革命前の露西亞の社會を想起するであらう。その嚴しき絶對主義的體制のもとに、資本家労働者ともに近代市民的精神に缺け封建的強壓政治のみが支配的であつたところ、革命の必然性はゆたかに條件付けられてゐたのである。極度の抑制禁忌は神經症・強迫症等から一轉してはげしい爆發となるとは、精神衛生學者が教へるところであるが、これは社會心理學的にもいへるところである。さりとて一切の枠を否定する極度の抑制缺如は人間本來の根本惡的傾向を助長し社會的政治的道德的根柢を危くする。敗戦後社會的拘束力の弛緩とともに、それ以前に事なきを得たものが凶惡犯罪に走つたことは人も知るところである。(この點については「人間研究」第一號内村祐之氏の論文参照)

註 軍國主義的教育において、軍隊内で表面的にきびしき軍律が守られる反面、隊内でも外面では多くの普徳的なことが行はれ、更に隊外や國外で如何に爆發的に暴行等が行はれるかがこゝで想起される。

要之、社會の恒常的拘束的要素と力動的解放的要素は適切な比例において相互補足的でなくてはならない。ことに社會的拘束力の過大は、それを行使する階級の自己中心主義によりて、或は政治上經濟上の甚しき不合理不正義を生み、或は反動的強權政治に走り社會進歩の窮極目的にしてまた基本條件である個人の自由及び創意を壓殺するにいたる。このとき權力を握る政治家は萬人を奴隸化する地上最惡の惡魔人となるのである。また逆に社會的拘束力の過小は個人の肆意を極度化する無政府状態において社會を解體させ萬人を塗炭の苦に投ずる。こゝに社會の秩序と個人の自由とを共に可能にするものとして力動的恒常性の場における「合理的拘束力」が問題となるのである。かゝるもの

こそは、健全な社會存立の基本條件である。かゝるものを本來的に可能にするものは各人が自由意志によつて共通の掟を立て守ること以外にはない。それはカントの法哲學に即していへば「各成員の自律的な共同立法」(Gesetzgebung)にほかならぬ。

實にかゝる方向をめざすところに、近代教育の根本動向もあるのである。つとに嚴格な規律と一定の寛容、社會的拘束力と個人的自由との相即統一において、國民の情操教育の鍵をつかまんとしたのは、教育學の二律背反に深く徹したシュライエルマツハーであつたが、力動的恒常性の場における社會性と自主性の生きた統合をめざし、いはゆる「チーム・ワーク」と獨立自主の態度との間の複雑な平衡」(the complex balance between teamwork and independence (N. E. A., 'The moral and spiritual values in the public schools, 1950. 參照))を可能にするあらゆる方途をひくすところに、近代の生活教育の根本方向もあるのである。力動的にしてあくまで個人の自由・創意を生かさんとする間にも秩序を維持しまともな對人關係の陶冶をめざす近代の學習法(社會化された討議法・監督自習法・問題解決法・プロジェクト法・構成法・協同作業等々)、更には代理不可能な個體の自主性を生かさず觸媒的な場をつくり獨裁的ならずして指導的であることをめざすガイダンス等、比々皆然りである。ことに注目すべきことは、社會的拘束力と個人的自由、社會性と自主性とを眞に力動的恒常性の場において統合し、萬人の共同立法として「合理的秩序」を可能にするものは、いはゆる社會的知性にほかならないといふことである。社會的知性に媒介されることなしに、萬人の自律的共同立法的なるものは不可能である。その限り社會的知性の根本的陶冶はたえず近代社會に生きた血をおくるものといはれる。しかして社會的知性を陶冶するに最も最力なる方法は、成長の各段階において青少年の生活における共通の個人的問題を自主協力的にしかも知性的に解く問題解決法である。かゝる方法による基礎陶冶は、初等・中等・高等教育と各段階を貫いて根氣よく行はれて身につけられ社會に浸透するのほかなきもので、その限り法令一つで時としては現象的に著しい社會的効果をあげる政治の立場と異なるものである。教育はもつとも根本的に人格



統合の中心そのものを新しくするものとして人間革命に参畫し、眞によき政治・經濟・文化を生む根源を培ふものである。政治は教育よりも即効をあらはす點で明かに現象的優位性をもつが、その即効性は權力の濫用といふ劇毒性と表裏してゐる。その限り權力を知性化するものとしての社會的知性の陶冶にあたる教育なしに、本來の政治もあり得ない。その限り教育は政治の本質的根源をなし、政治に對し本質的優位性をもつ。力の面において教育その他一切のものを支配するものとして、政治の現象的優位性がいよいよ高まつて來た近代社會において、政治を知性化しその本質的根柢を可能にする社會的知性の陶冶をめざすものとして、教育の政治に對する本質的優位性がいよいよ明かに認識せられつゝあることはまことに注目に價する。このことは近代民主主義の必然的歸結といはれようが、同時に近代民主主義や政治中心主義にまつはりつく樂天主義的人間觀について深刻な反省が必要なること、まさにラインホルト・ニーバーが切言してやまぬが如くであらう。

註 教育と政治の問題についての細論は他日を期する。

## 八

上來我々は人間存在の生物學的・生理學的・心理學的・社會學的な次元における力動的恒常性の構造とその意義を追求して來たのであるが、そのうち最下の次元たる生物學的乃至生理學的次元における力動的恒常性乃至動的平衡の場は意識性に關し如何なる意味をもつてゐるであらうか。それがその平衡の破れにおいて意識を動機付けるものである以上、それは純粹に意識關係性を含まぬものではあり得ない。フロイト派が意識下にはたらくいはゆる生命のエネルギーをリビドーとしてとらへるとき、それは果して單なるエネルギーであらうか。それが「渾沌」「わきかへる興奮の大釜」(フロイト)などといはれるとき、それは果して單なる物質の運動であらうか。ことにユンクがショックペインハワーの「意志」につながるものとしてリビドーを定義し、破壊的な面と創造的な面とを併せもつリビドーは「神

であるとともに悪魔である」とまでいふとき「生命力の發展」第一編第四章中村吉敏譯参照、それは明かに意識・ロゴス・精神につながるものをもつてゐるといはねばならない。すなはち人間存在においては、最低の次元に至るまで最高のものがその力を及ぼし、またその逆であること、マクス・シェラー等が説く如くである。まさにかゝる上下相即性の場においてあればこそ、リビドーのわきかへる興奮の渾沌は神ともなれば悪魔ともなるといはれるのであらう。我々はニーバーとともにフロイト派に次の如く問ふべきであらう。動物はその無意識の深みにおいて近親相姦の衝動の表出をもとめてもがくが故に、彼等はオイディプス・コンプレクスに悩み罪の意識に苦しんでゐると、想定せられるであらうか云々 (op. cit. p. 43)。

人間存在においては、最高なるものが最低なるものに光を投げ、最低なるものも意識・人格・精神につながる何ものかをもつが故に、生理的平衡の破れも「我がもの」として意識され、生理的心理的な病態や歪曲が我々を悩まし苦しめるのである。その限り各次元の力動的恒常性の場は客體的に存在するとともに主體化への方向をそのうちに宿し主體化され得るのである。まさにその故に、人間生命の力動的恒常性の場において、意識も各種の要求も問題解決的努力も「我がもの」として代理不可能的に現れるのである。單に物質的客觀的な場においては、意識も苦惱もあり得ない。力動的恒常性の場における不安定の平衡を不安定または危きものとして意識しそれに風馬牛的であり得ないのは、その平衡自體を「自己のもの」とする主體的契機がその場自體に生きて來るからである。かゝる契機は生物學的次元から心理學的次元・社會學的次元等々と次元が高まるにつれて意識・人格・精神の階序的規定をもつてますます鮮明にあらはれ、力動的なる多様を貫いて恒常的に一なるものを生かす意志的統合性はいよいよ強くなる。この方向に人間の「超越」への關係が成り立つとせば、この方向において力動的恒常性の相を簡單に見て行くことは本稿の最後の課題である。

かくて上下相即的な人間生命の場の生理的心理的次元において、心身一如的に人間をたえずゆすぶり動かしてゐる

のは情緒にほかならない。情緒的安定性こそは破れやすきことこの上なき平衡に住する存在としてあらゆる人間が時々刻々求めてやまぬものである。かゝる安定性を興へるものとして、我々はさきに(六)消極的ガイダンスと積極的ガイダンスとをあげたのであるが、人間存在が動揺してやまぬ不安定の存在である以上、眞に安定性への道は動揺を避け情緒を殺してストップ的不動心やエピキュロスの平靜心アフラクシヤに至ることは事實上困難である。こゝに積極的に變化に取組むのみならず、更に百尺竿頭一尺を進めて動そのものにおいて全人格的統合を實現する純一な活動こそ情緒的安定性を興へるといふべきであらう。動いてやまぬものはまともに——またはフロイト的にいへば——昇華的に動かすことによつてのみ、動自體において純一な生命を現すのである。人間は純粹に活動すること自體において深く定まるものをもち、こゝに「自己自身との一致」を體驗し得るといふべきである。「人間の最初にして最後のものは活動である」(ゲーテ)といはれる所以であらう。純粹活動とはあらゆる生理的・心理的・社會的作用を統合する全人格的活動を意味し精神分裂病者に見る如き内閉的に硬化せる活動と原理的に異なるものである。

かゝる純粹活動の一つに音楽的リズム等に代表せられる藝術活動がある。美的活動もいはゆる *déformation* の如き平衡を破るものをふくみ力動的に平衡を實現するものである。それは「危きに遊ぶ」力動的平衡の世界である。かゝる美における力動的平衡を生活經驗の再組織に深く結びつけて理解せんとするものにジョン・デューキの藝術論 (*Art as experience*, 1934) がある。セザンヌの果物を描く靜物において、果物相互間及び背景に對する「力動的平衡」*dynamic equilibrium* において藝術的に豊かなヴォリュームを見るなどと語るデューキは、生命の根本的な在り方として力動的恒常性をみとめる。すなはち「生きてゐるものは、その生活において秩序を求めるとともに、新奇性をも求める。混亂も不快であるが、倦怠もまた不快である」(*op. cit. p. 167*)。かゝる生の根本動向をうけつぎのばす藝術家が描きまた作るとき、その活動の統合的發展は「氣まぐれでもなければ、固定したものでもない」(*p. 170*)。「藝術家の眞の仕事は、たえず變化しつゝ展開する運動の間に整然として一貫したものを知覺する經驗をつくり上げるに

ある」(p. 110)。古來美は「多様における統一」といはれてゐるが、それは多様な外的並存であつてはならない。すなはち典型的には音楽などに見る如く、對立し相互に抵抗するエネルギーがはりあつてサスペンスをつくりつゝ相互協力的にはたらき合つてそれをほぐすところにあらはれる「力動的な」統一こそは、藝術作品を特色付ける「多様の統一」にほかならない(p. 161)。自然と生命の關係の根柢に「つながり美の形相を可能にする第一のものとしてリズムがあるが、リズムこそは ordered variation of changes (p. 134) 或は constant variation (p. 164) であるといはれ、そのヴァリエーションは秩序と同様に重大であるのみならず、美的秩序に缺くべからざる協力要素であつて、秩序を破らぬ限り、ヴァリエーションが大なるだけ、その効果も大である(p. 110)。リズムにおいては、音相互が力動的秩序を保ちつゝ歩一步「經驗の統合性」(p. 164)を高めてそれ自身全きものとなるのである。こゝに全人格的統合活動によつて充された力動的恒常性の場が主客合一的に現成する。人はこゝにいはいはゞ「物自體」において「自己自身との一致」を經驗する。まことに音楽は物自體を興へる純粹經驗である。

しかしかゝる人格的統合の極致を示す純粹活動は音楽的活動のみではない。いはゆる一藝一道に達せる人々の三味境はかゝるものとして數多く擧げられるであらう。その一例として我々は「兵法五輪書」中最も精彩のある「水の巻」の一節をあげることができる。「兵法の道におゐて、心のもちやうは、常の心に替る事なかれ。常にも、兵法の時に、少しもかはらずして、心を廣く直にして、きつくひつばらず、少しもたるまず、心のかたよらぬやうに、心をまんな中におきて、心を靜かにゆるがせて、そのゆるぎのせつなも、ゆるぎやまぬやうに、能々吟味すべし。靜かなる時も心は靜かならず、何とはやき時も心は少しもはやからず、心は體につれず、體は心につれず、心に用心して、身には用心をせず、心のたらぬ事なくして、心を少しもあまらせず、うへの心はよはくとも、その心をつよく、心を見わけられざるやうにして、少身なるものは、心に大きな事を残らず知り、大身なるものは、心に小きき事をよく知りて、大身も小身も、心を直にして、我身のひいきをせざるやうに心をもつ事肝要也。心の内にこらず、廣く

して、ひろき所へ智慧を置くべきなり云々」こゝには力動的にして深く定まりながら何ものにも止住せざる力動的恒常性の場の微妙なニュアンスが細かにとらへられてゐるが、かゝる兵法の道を禪の道で深めたものに澤庵の「不動智神妙録」がある。一所に固まり一事にとゞまる所住煩惱の偏心を脱落し、何ものにも止まらずして何ものにも轉じ得る正心、或は「總身に廣がりて全體に行き渡る」無心の場において不動智をつかむ澤庵は「動轉せぬとは物毎に留らぬことに候」といつてゐる。こゝでは「動轉せぬ」不動の恒常性は「物毎に留らぬ」力動性そのものにほかならない。こゝに人格統合の極地における力動的恒常性の場がまさしく動靜一如の純粹活動そのものにおいて開ける。

かゝる純粹活動は人格的統合の極深き「自己自身と一致」を現するのみならず、まさに自由無碍純粹無雜人にして天に迫るものであるが、それが客觀的に天人合一性に達し得たか否かはなほ問題として残るところである。如何に自己自身と一致したとはいへ、それが完全に主觀性を脱し得たといふ保證はどこにもないのである。人格統合の中心において萬人に通ずる場を開かぬ限り、その自主性乃至自由はその人を天人一如的に安んぜしめるものではない。そこでは個人的自由と社會的秩序、自主性と社會性等の矛盾はなほこえられないであらう。かへつて人にして天に迫る自由は逆に人にして天を僭する罪惡に轉ずることもあり得るのである。個人的主觀的立場において如何にその人格的統合を高めて天に迫るも、その純粹活動の中心が自己そのものにあるとき、「己が住居をこゝに定めて晝夜あり」といふ相對的見地は執拗に我々にまつはりつき、個人的自由と社會的秩序とを矛盾拮抗せしめるところ、窮極的な情緒的安定性は遂に望むべくもないのである。かくて個人的自己を中心に据えて動かさぬ限りの人格統合 integration による純粹活動は、今やその人格の中心そのものを絶對的に流動化する愛のはたらき合ひ interaction の場の絶對行にまで昇華されねばならないのである。

人間的な自己中心主義に止まる限り、人間は所詮動的にして相對的な平衡に住し得るにすぎない。人間の住する平衡は遂に相對的なるを免れない。絶對的平衡は人のものでなく、天・神・佛のものとして超越そのものに屬する。ま

ことに人間は下に物質をふまへ上に超越の天を仰ぎ天地の間に立つ直立人 *homo erectus* として、立つとともに倒れる危機に瀕しつゝ、辛くも相對的平衡を保つ有限の存在である。下なる物質の自然的平衡と上なる超越の絕對的平衡との間に力動的相對的平衡を保つのが人間存在である。人間は物質的欲望にそのかされるときも、超越的地平にもつながら上下明暗双々の機に動搖する主體である。すなはち物にさそはれ天に背いて己に執し罪をかすとも己をこえて天に歸入する如き順逆の機に立つところに、人間が自由の主體たる所以がある。人は一筋に天に背くのも天に歸するのでもない。人間は天に歸すべきものをもちながら、必しも天に歸しない逆説的存在である。ケルケゴールが説く如く、まことに罪は必然性からおこるのでもなく、また偶然性からおこるのでもない。こゝに人間がたえず動搖し不安に襲はれる所以がある。かゝる動搖不安に人間が超越者に背く罪が接木されるのである。かゝる境域をこえて絕對的平衡に入る道は、自己の活動の固い中心そのものを超越者の光によつて昇華的に流動化し、自己の活動をあげて超越者の絕對行に歸入すること以外にはない。超越者はあらゆるものを生かし育てる愛に生きる絕對無所住の行そのものにほかならない。實に超越者は永遠なる愛の絕對行において晝夜を知らぬ光そのものであり、我々はその愛の行に參ずることによりてのみその光に浴するのである。神の愛は絕對的力動性即絕對的恒常性としての永遠の活動そのものである。これこそ人間をして動即靜の絕對的平衡に入らしめる永遠の根源である。絕對者の性格を永遠といふならば、それは時間的無限でも超時間的な未分化の二者でもなく、「人間の變化する存在の變化せぬ根源」*the changeless source of man's changing being* (R. Niebuhr, op. cit. p. 124) にほかならぬ。人間存在をこえて不動恒常でありながら、人間を動かしてやまぬものは、自己自身に自足して動かす純粹形相的絕對者であるといふよりも、むしろ人々の純粹活動における人格統合の中心をほぐして一即多にして自利利他「自我愛用して日に新なる」絕對行にまで流動化せしめる愛の絕對根源にほかならない。「己が住居をこゝに定めて晝夜あり」といはれる相對的な自己の中心を絕對愛の行に流動化すれば、成敗明暗あげて光に化し、「日月と俱に輪廻すれば、晝夜なし」

といふ絶對の風光が開ける。神の愛の場こそは個人的自由と社會的秩序とを共に生かす力動的恒常性の絶對至極の場である。これをおいて自由と秩序等のあらゆる人間學的逆説性を究極的にほぐすものはないのである。あらゆる相對的なるものに執する自己を絶對化してバビロンの塔をきづく者は、「神のみ胸に懃ふまでは我等人間の心は遂に安きを得ぬであらう」といふ語の眞義に永遠にあづかり得ぬであらう。天地の間に立ち、永遠の相 *sub specie aeternitatis* と時間の相 *s. s. temporalis* との相互浸透において後者より變化性乃至力動性を、前者より統一性乃至恒常性の機をうけ、辛くも動的平衡を保つ人間は、地に倒れて時間的變化の渦に没し去る罪の主體となるとき、天を仰ぎて永遠の心をもつて歴史をつくる愛の主體ともなり得る如き逆説的自由に生きる。こゝに人間の究極的本質があるといふべきであらう。

(丁)

後記 私如きものにまで終始厳しき慈眼をそゝがれた朝永先生に何ほどかのもを書いて捧げたい微衷も測らざる病氣のため  
に十分力をつくし得なかつたのは、私の遺憾とするところである。

(筆者 京都大學教育學部兼文學部「教育學」教授  
文學博士)

world. The intelligible world, however, does not exist apart from, or behind, the sensible world: rather, the former is realized immanently as a world of intelligible order and relationships in the midst of the latter. The sensible world is the material of the intelligible world.

This line of argument could be made more definitive by a discussion of the kingdom of ends. However, space does not permit to include this third point, which will be taken up in a separate essay.

## The Principle of Dynamical Constancy

*By* Yūkichi Shitahodo

Dynamical constancy is the terminology suggested by Walter B. Cannon for the understanding of the fundamental structure of life that the human organism maintains itself in a definite form through the dynamic process of metabolism. It may be regarded as synonymous with 'dynamic equilibrium' or 'dynamic stability' employed by some biologists in their theories. Some embryologists explain the genesis and the development of living creature by the contradictory concept 'labile determination' in the similar manner. The principle of dynamical constancy is of great significance not only in the fields of biology, physiology, embryology and genetics, but also in psychology, psychopathology, characterology and sociology, or even in aesthetics, ethics and philosophy of religion as well. In other words, this principle governs the life of human being from its lowest dimension through the highest. It is this complementary interrelation of dynamic  $\rightleftharpoons$  constant nature to bring the essential form of life to scientific light. Life is neither dynamic nor static, but is both. Nor is it determined simply by necessity or by chance. This outlook will never fail to suggest something valuable to the science and philosophy of education.